石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第428号　令和元年6月1日発行

脇田和と猪熊弦一郎 ～モダンの展開～

名刀と刀絵図【古美術】

国宝《剣　銘吉光》白山比咩神社蔵
―「名刀と刀絵図」より―

絵画優品選【前田育徳会尊経閣文庫分館】

村田省蔵展―大地を描く【近現代絵画】

手わざの手ざわり【近現代工芸】

新収蔵品と優品【近現代絵画・彫刻】

- 6月の企画展示室
- 平成30年度の新収蔵品について
- 6月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

第7·8·9展示室

脇田和と猪熊弦一郎
～モダンの展開～

4月20日（土）～6月9日（日）　会期中無休

脇田は鳥を終生描きました。猪熊についてもそれはいえます。熟視し、描き続けた二人にとっては、彼ら彼女らは手がすっかり覚えた存在であったに違いありません。

脇田の描く鳥は一種の記号といっていいかと思われます。単純化され記号と化した鳥たちは自由に空を飛び回ります。でもそれらはどんな種類の鳥かというと、あまり明確ではありません。いわば〝脇田鳥〟とでも呼ぶべき抽象的な存在です。

一方猪熊の鳥はどうでしょう。初期にはカラス、晩期には大型の鳥が登場します。デフォルメされているものの、脇田に比べ具体的です。ここに両者の作風の違いがあります。

猪熊の作品は色彩も形も明確で目に飛び込んできます。ニューヨークでの二十年間の創作時期に油絵具からアクリル絵具に切り替えたこともその要因でしょう。速乾のアクリル絵具を筆にたっぷり乗せ、ぐいぐいと描き進めていきます。

脇田の作品は一九五〇年代から六〇年代にかけてシャープな形を見せた時期がありますが、色彩は淡くかすれ、内省的です。その後、形体は柔らかく具体性を強めていきますが、色彩の対比を強調することはありませんでした。つまり、猪熊の作品は外に拡散するのに対し、脇田は内へ内へと思索するのです。明と暗、剛と柔、二人の個性をぜひ本展会場にてご堪能ください。

猪熊弦一郎《鳥たちの朝》香川県立ミュージアム蔵
©The MIMOCA Foundation

前田育徳会尊経閣文庫分館

絵画優品選

6月14日（金）～7月22日（月）　会期中無休

今回は、十四世紀から二十世紀までの日本、中国、イタリア、フランスの画家の作品を取り合わせてみました。このうち最も古いのが、中国・元時代後期の画家、王若水の《花鳥図》です。若水は字（あざな）で、名は淵で十四世紀に活動していたことが知られています。本作のような花鳥画に定評があり、対象の大胆なクローズアップは、宋から元時代の典型的な表現ということができます。こうした表現は続く明時代にも継承され、やがて日本の雪舟に大きな影響を与え、室町時代後期から桃山時代の大画面による花鳥画へと結実しました。

王若水の次に、岸駒の《松下飲虎図》に注目したいと思います。こちらは十九世紀と王若水から約五百年後ですが、川の水を飲む虎と、松に鵲を合わせて大画面の吉祥図に仕立てる手法が明時代に盛行したことを思い起こすと、明時代の絵画を熱心に研究した岸駒の労作と王若水は意外に近いことを改めて認識します。

季節を意識した作品としては、加賀藩の御用絵師・梅田九栄（六代）が、鷹狩の諸相を季節ごとに四巻に描いた《鷹狩図》（夏の巻）を選びました。本作は、鷹狩をテーマとした四季風俗図の趣があり、夏の巻では屋形船での宴会や、鵜飼いの様子なども描かれています。

今回は、前田家十六代・利為が集めた日本画、西洋画も展示します。このうち、久々の展示となるアマン＝ジャンの《婦女喫煙図》は、この画家の真骨頂といえる、パステル調の夢幻的な雰囲気での婦人像であり、利為が一九三六年に購入したものです。

《花鳥図》王若水

第２展示室

名刀と刀絵図

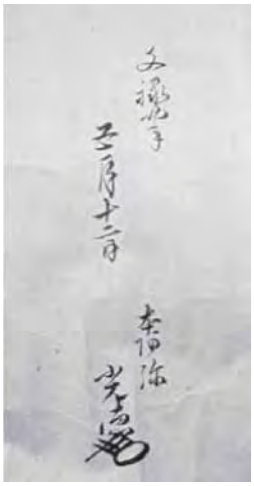
6月14日（金）～7月22日（月）　会期中無休

今回の特集では、何よりも全長十九メートルにも及ぶ《刀絵図》が全巻一度に公開されることに注目いただきたいと思います。本作は、一九三七年に重要美術品に指定されています。その際の解説には、「本図巻に収録されし刀剣押型は、豊臣時代に於て最も貴重されし刀剣にして、主として豊公の愛刀なり。筆者本阿弥光徳は歴代本阿弥家中最も鑑刀目利の名人として知られ、斯道の権威として重きをなす。光徳　文禄四年（一五九五）の自筆にして此の種文献の最古のものに属し、貴重資料なり。」（片仮名を平仮名に改め句読点を追加）とあります。

作者の本阿弥光徳（一五五六～一六一九）は、桃山から江戸時代前期の刀剣鑑定家で、本阿弥光利の長男です。本阿弥宗家の九代にあたり、分家の本阿弥光悦（一五五八～一六三七）とは従兄弟の関係となります。豊臣秀吉に信任され、慶長の初めごろ刀剣極め所と折紙発行を許可され、その後徳川家康に仕えています。今回展示する《刀絵図》のような、鑑定の参考にするために刀剣を写生した「本阿弥光徳刀絵図」が数種伝存しています。その代表的なものが、毛利輝元の求めに応じて文禄三年（一五九四）に書写したもので、国の重要文化財に指定されています（公財 毛利報公会蔵）。

そこで、重文指定のものは毛利本、今回展示するものは重要美術品指定当時の所蔵者から大友本と通称されています。そしてこの大友本は二〇〇一年に、大友家から当館にご寄贈いただきました。毛利本と大友本の相違は収録点数で、毛利本が六十五口に対して大友本は四十口となっています。

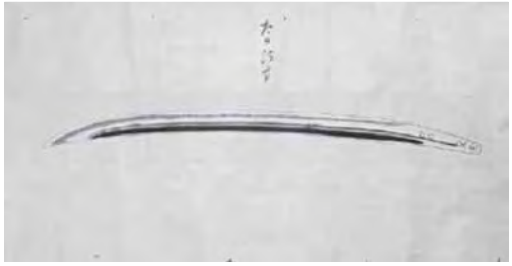
また、名刀として、国宝《剣　銘吉光》（白山比咩神社蔵）ほかを展示します。



《刀絵図》「奥書」、本阿弥光徳

学芸員の眼

今回展示する《刀絵図》（大友本）については、一九三七年に国の重要美術品に指定されたものの、伝来の経緯が明確ではなく、保存状態も比較的良好なため、一部の刀剣研究者から十八世紀後半以降の写しではないかとの指摘が出ていました。確かに本阿弥光徳によるとされる「太閤御物刀絵図」あるいは「本阿弥光徳刀絵図」はいくつか伝存していますが、そのほとんどは写しと考えられます。今回の展示品と写しの決定的な相違点は、輪郭線の描き方に逡巡がないことです。そこから実物を見た人物が描いたと結論付けたいところですが、まだ十分ではありません。そこで三年前に石川県文化財保存修復工房と合同調査を行い、紙の繊維や填料（てんりょう）と呼ばれる添加物の有無を調べました。その結果、填料は確認されず、紙には十六世紀末の特色があることから、大友本は写しではなく「本物」であるとの結論に至りました。



《刀絵図》より「たかのす」、本阿弥光徳

第4展示室

追悼　没後1年

村田省蔵展―大地を描く

【近現代絵画】

6月14日（金）～7月22日（月）　会期中無休

本展は平成三十年七月十四日に逝去された洋画家村田省蔵氏の没後一年にあたり、石川県立美術館所蔵品など二十七点の村田油彩作品とスケッチ等で、氏の画業七十年の歩みを回顧するものです。

村田氏は金沢美術工芸専門学校時代の女性像「黄衣」で、小絲源太郎に色感の良さを認められ、その後上京して小絲に師事しました。風景を画業の核とし、はじめはその中に人物を点景として加え、生活感のある情景を描きましたが、やがて風景のみをたくましい筆触で、造形的に構成するようになっていきました。

六十歳半ばからは新潟の稲架木（はさぎ）が立ち並ぶ景色をテーマとし、生命を力強く歌い上げてゆきます。稲架木が雪の中に立ち並ぶ姿から、やがて黄金色の稲の実りをうかがわせる景色へと進み、さらに、新緑の頃の稲架木、そして稲穂が架けられた稲架木へと、晩年に至っても歩みは止まることはありませんでした。

村田省蔵氏のたゆまずに深まる詩情と造形美の世界を、ぜひご覧いただきたく思います。

［村田省蔵氏略歴］

昭和四年金沢市生まれ。金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学）の第一期生として、宮本三郎の薫陶を受けました。二十六年に画家となることを決意して上京、小絲源太郎に師事しました。生前は日本藝術院会員、日展顧問、金沢学院大学名誉教授、財団法人石川県美術文化協会名誉顧問として活躍され、また、現代美術展には、後進の育成となるよう常に出品を続けられました。

村田省蔵《芽吹き》

第5展示室

手わざの手ざわり

【近現代工芸】

6月14日（金）～7月22日（月）　会期中無休

工芸品の魅力のひとつは、身体で触れて楽しむことができることにあります。重さを感じ、いろいろな角度から眺め、用途によっては口をつけることもあるでしょう。「工芸」の英訳、Craftという語は本来「手工芸、手づくりの品」という意味を持っています。手づくりの品々には、制作過程がそのまま痕として残ったものが少なくありません。そのことが、使う側に作り手の姿をなんとなく感じさせ、安心感を与えてくれます。

しかし美術館の所蔵品はいつもケースの中に収められ、一定以上近づくとガラスに頭をぶつける羽目になります。もどかしい思いをされたことのある方も多いでしょう。とはいえ、文化財として工芸作品を保護し、伝える役割を考慮すると、なかなか直に触れていただくこともかないません。そこで今回は、①作品の重さを計測して記載する②通常より作品の細部を見られるように展示するという二つの方法で、なんとか「手わざの手ざわり」をお伝えしたいと思っています。たとえば乾漆や竹で作られた製品は軽いと言うけれど、一体どのくらい軽いのでしょうか。染めや織の技法を言葉で解説されてもなかなかイメージができないけれど、実際に拡大してみるとどのようになっているのでしょうか。木材の違いは、重さに影響するのでしょうか。見慣れたコレクションを、ちょっと変わった視点から捉えなおしてお伝えします。

また会期中、展示作品と同様の技法で制作されたものに直接触れていただく機会を設けます。触れたあとでは、展示作品が違って見えてくるはずです。皆さまの感じた「手ざわり」をぜひお聞かせください。

石黒宗麿《梅華皮筒茶碗》

第3・6展示室

新収蔵品と優品

【近現代絵画・彫刻】

6月14日(金)～7月22日(月)　会期中無休

平成三十年度、純粋美術部門は多彩な作品が収蔵されました。

まず、洋画部門から中川一政《向日葵》です。御年八十九歳での制作は「晩年を代表する」と形容したいところですが、この後九十七歳まで描き続けた中川にとって、果たして相応しいで表現でしょうか。力強い筆致は気力の充実を十分に偲ばせます。同じく油彩では村田省蔵作品を八点ご寄附いただきましたが、こちらは同時開催の「村田省蔵展」でご紹介します。その他高光一也作の肖像作品、鉛筆画の名手木下晋の自画像、若き日の鴨居玲など興味深い作品が目白押しです。

日本画部門では、「仁志出龍司―静謐なる世界―」を機に代表作三点を作家本人からご寄附いただきました。季節感あふれる作品はコレクション展示に大いに活用させていただきます。また、ユニークなところでは富田温一郎の水墨山水画と彩色牡丹の屏風二点です。富田は白日会を結成し、外光派の作風で知られた洋画家です。そのほか安嶋雨晶や上田珪草の昭和三～四十年代の優品を寄附いただきました。

また写真作品が初めて収蔵されました。平成二十九年度開催の「写真と幻想」展を機に吉　川恍陽作品十点ご寄附いただきました。吉川恍陽は石川における抽象写真の草分け的存在で、初めての写真作品収蔵に相応しい作家といえます。

彫刻では、あどけない表情が印象的な田中昭《遊びごころ》をご覧ください。そのほか季節の優品も展示しますのであわせてお楽しみください。

中川一政《向日葵》

第7・8・9展示室

第49回日彫北陸展

6月13日(木)～17日(月)　会期中無休

※午後5時閉室

日本彫刻会は、具象彫刻を中心に、造形芸術の向上に努めている国内では最大規模の彫刻公募団体です。本展は四月に上野東京都美術館で開催した第四十九回日彫展より芸術院会員をはじめ各種受賞作品と、会員から選抜された優秀作を基本作品とし、石川、富山の地元出品作を合わせ、約百点を展示します。ぜひご高覧いただきますようお願い申し上げます。なお、身体障がい者手帳をお持ちの方と、付き添い二名を入場無料とし、手に触れながらみられる作品も展示します(手形マーク添付)。また、会期中の六月十六日(日)には、彫刻のワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」を開催します(参加費無料)。日彫会会員が優しく指導しますので、ぜひご参加下さい。

◇入場料／一般五〇〇円　高校・大学生三〇〇円
小中学生無料

◇連絡先／石川県立工業高等学校内　中口一也
電話　〇七六－二六一－七一五六

第7・8・9展示室

第105回光風会展金沢展

6月20日(木)～24日(月)　会期中無休

光風会は文展、帝展、日展の中核として発展してきました。新しい時代の変化の中で芸術院会員を中心に、多彩な具象をめざす絵画部、堅実なモダニズムを追求する工芸部による活動が行われています。

今回の展示では、地元作品四十三点に基本作品と合わせて約百三十点を展示します。清新な感性持つ作品をぜひご覧ください。

◇主　催／一般社団法人光風会、北國新聞社

◇入場料／一般・当日七〇〇円　前売り五〇〇円
大学生・当日三〇〇円　前売り二〇〇円

◇連絡先／金沢市菊川一丁目二三－四二　児島新太郎
電話　〇九〇－六五〇五－一九六三

平成30年度

新収蔵となった作品

分類	No.	作品名	作者名	員数	制作年	寄附者
陶磁	①	鉄釉鉢	高　権成	1口	平成12年（2000）	高　権成
陶磁	②	鉄釉千筋鉢	高　権成	1口	平成15年（2003）	高　権成
陶磁	③	色絵布目オシドリ文飾皿	中嶋　寿山	1口	昭和30年代後半	中嶋　健一
陶磁	④	色絵群鶏文丸台鉢	中嶋　寿山	1口	昭和36年頃（c.1961）	中嶋　健一
金工	⑤	銀真鍮象嵌唐獅子牡丹文鐙　銘加州住盛平作	盛平	1双	江戸18世紀	木村　悦雄
油彩画	⑥	自画像	木下　晋	1面	昭和50年（1975）	木村　悦雄
油彩画	⑦	向日葵	中川　一政	1面	昭和57年（1982）	中川晴之助
日本画	⑧	信州内山峡	富田　温一郎	6曲1隻	昭和4年（1929）	大木　健彌
日本画	⑨	白牡丹	富田　温一郎	6曲1隻	昭和4年（1929）	大木　健彌
日本画	⑩	松苗山	上田　珪草	2曲1隻	昭和34年（1959）	徳永　篤人
日本画	⑪	池心	安嶋　雨晶	1面	昭和40年代	松本　隆夫
日本画	⑫	孤墨	仁志出　龍司	1面	平成5年（1993）	仁志出龍司
日本画	⑬	萌春の道	仁志出　龍司	1面	平成16年（2004）	仁志出龍司
日本画	⑭	浄晨	仁志出　龍司	1面	平成18年（2006）	仁志出龍司
写真	⑮	作品B	吉川　恍陽	1面		吉　川真樹
写真	⑯	時の壁	吉川　恍陽	1面	昭和41年（1966）	吉　川真樹
写真	⑰	時の流れ	吉川　恍陽	1面	昭和41年（1966）	吉　川真樹
写真	⑱	固執	吉川　恍陽	1面		吉　川真樹

分類	No.	作品名	作者名	員数	制作年	寄附者
写真	⑲	人間疎外	吉川　恍陽	1面		吉　川真樹
写真	⑳	固執A	吉川　恍陽	1面		吉　川真樹
写真	㉑	崩壊シリーズNo.52	吉川　恍陽	1面	昭和41年（1966）	吉　川真樹
写真	㉒	赤と青の情景	吉川　恍陽	1面	平成元年（1989）	吉　川真樹
写真	㉓	無題	吉川　恍陽	1面	1980年代	吉　川真樹
写真	㉔	無題	吉川　恍陽	1面		吉　川真樹
油彩画	㉕	高橋利吉像	高光　一也	1面	昭和31年（1956）	髙橋　春
油彩画	㉖	秋光	村田　省蔵	1面	平成29年（2017）	村田　淑子
油彩画	㉗	爽涼	村田　省蔵	1面	平成23年頃（c.2011）	村田　淑子
油彩画	㉘	プロムナード	村田　省蔵	1面	平成23年頃（c.2011）	村田　淑子
油彩画	㉙	なごり雪	村田　省蔵	1面	平成21年（2009）	村田　淑子
油彩画	㉚	寂	村田　省蔵	1面	平成9年（1997）	村田　淑子
油彩画	㉛	吉野	村田　省蔵	1面	平成8年（1996）	村田　淑子
油彩画	㉜	アンダルシアの風	村田　省蔵	1面	平成7年（1995）	村田　淑子
油彩画	㉝	雪熄む	村田　省蔵	1面	昭和63年（1988）	村田　淑子
油彩画	㉞	蛾	鴨居　玲	1面	昭和37年頃（c.1962）	富山栄美子
油彩画	㉟	マネキン	鴨居　玲	1面	昭和37年頃（c.1962）	富山栄美子
油彩画	㊱	時計	鴨居　玲	1面	昭和37年頃（c.1962）	富山栄美子
彫塑	㊲	遊びごころ	田中　昭	1点	平成24年（2012）	田中　昭

平成30年度新収蔵品 37点　収蔵品総計（平成31年3月末 現在）3,919点

2. 高権成《鉄釉千筋鉢》

3. 中嶋寿山
《色絵布目オシドリ文飾皿》

5.《銀真鍮象嵌唐獅子牡丹文鐙　銘加州住盛平作》盛平

6. 木下晋《自画像》

11. 安嶋雨晶《池心》

14. 仁志出龍司《浄晨》

19. 吉川恍陽《人間疎外》

25. 高光一也《高橋利吉像》

26. 村田省蔵《秋光》

6月の行事予定

■キッズ・プログラム鑑賞講座「手わざの手ざわり～さわってみよう～」
13時30分～15時　2階展示室　参加無料

30日(日)　工芸品の手ざわりを感じたりする体験で、その素材に注目してみよう。
対象：小学生とその保護者　定員：当日先着20名

■土曜講座
13時30分～15時　美術館講義室　無料

8日(土)　「猪熊弦一郎とアメリカ美術」　普及課長　二木伸一郎

15日(土)　「脇田和の素描・版画作品」　担当課長　深山千尋

22日(土)　「人形　技法と歴史　伝統工芸」　担当課長　寺川和子

■「脇田和と猪熊弦一郎」展ギャラリートーク
11時～　要観覧料

2日(日)　展覧会の担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について解説を行います。

9日(日)

34. 鴨居玲《蛾》

37. 田中昭《遊びごころ》

8 富田温一郎《信州内山峡》

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.38

《友禅像》ゆうぜんぞう

高さ37.5㎝×幅42.4㎝×奥行き29.6㎝　昭和28年(1953)

吉田三郎　よしだ・さぶろう

明治22年(1889)～昭和37年(1962)

本作は江戸時代中期の画工である宮崎友禅斎(生没年不詳)をモデルとした作品で、真摯な男性像制作を得意とする吉田三郎によって手がけられました。

友禅斎は、元禄時代前後に京都の知恩院門前に住み、扇面や小袖の文様を書いて名声を博しました。友禅斎の名と意匠については、井原西鶴『好色一代男』(天和二年・一六八二年)では扇が、『源氏ひなかた』(貞享四年・一六八七年)では小袖の意匠にそれぞれ応用されていたことが記録されています。その後、友禅斎は自ら『余情ひなかた』という雛形本を出版しています。

友禅斎の文様が小袖の意匠などに応用され、雛形本まで出版していますが、本人が友禅染特有の糸目糊挿し技法の創意にどれだけ関わったか、現在のところ詳細は不明です。むしろ、彼の意匠が小袖に取り入れられ、それが友禅染として流布したと考えた方が良いかもしれません。

作者の吉田三郎は、明治二十二年(一八八九)金沢市に生まれます。明治四十年(一九〇七)に石川県立工業学校を卒業し、田端(現在の東京都北区田端)の板谷波山のもとで下宿しながら彫刻を学びます。明治四十五(一九一二)年東京美術学校彫刻科卒業、在学中の明治四十三年(一九一〇)に第四回文展に初入選し、以後帝展・新文展・日展に出品しています。徹底した写実主義を基礎に、ロダンやムーニエのロマン主義的要素を取り入れて、独自の作風を確立しました。

宮崎友禅斎の肖像画が残っていないので、吉田のイメージでつくられましたが、肉付きや表情に生気や温かさが込められている作品です。

本作品は六月十四日から七月二十二日まで第4展示室で展示しています。

次回の展覧会

令和元年7月27日(土)
～8月26日(月)
会期中無休

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第２展示室
前田家の名宝Ⅰ	描かれた人物 さまざまな表現 【古美術】

第３・４展示室	第５展示室	第６展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	ひく・さす・ほる 石川木工芸の現在 【近現代工芸】	夏休み 親子で楽しむ美術館 かお・カオ・顔 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
6月3日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

6月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

6月の休館日は
10日(月)～12日(水)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは 092-716-1401
株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第428号(毎月発行)
2019年6月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。